第 1 回 IT リテラシーWG 議事要旨

日時	2018 年 9 月 18 日(火) 15:00～17:00
場所	(独)情報処理推進機構 15 階委員会室 3
参加者	佐藤 委員(WG 主査) 尾花 委員 高橋(範) 委員 高橋(秀) 委員 田口 委員 林 委員 （オブザーバ） 経済産業省 情報技術利用促進課 経済産業省 情報技術利用促進課 地域情報化人材育成推進室 情報処理推進機構 国家資格・試験部 （事務局） 情報処理推進機構 人材プラットフォーム部
資料	資料 1： ITLS(IT Literacy Standard)案の策定について 資料 2： ITLS 原案

1 ITLS(IT Literacy Standard)案の策定について（説明）

(1)今後の WG での取り組みの予定

- 基準を作るだけでなく啓発的な取り組みも議論していきたい。初版は年内に公表予定であり、皆様にはお許しいただければ WG を継続し、基準の改訂や啓発的な活動についてもご協力いただきたい。本件の取組み根拠であるが、未来投資戦略での記載が根拠となっている。

(2)IT リテラシー・ITLS の定義

- これまでに IT リテラシーに関する用語がどのように定義されてきたかをまとめたが、統一的な定義は見当たらないとの認識。Web ベースだが海外の調査資料もまとめたが、こちらもやはり確立された定義は現状は無いように感じている。OECD の成果物にはリテラシー、コンピテンス、PIAAC などが定義されている。生徒向けの PISA。成人向けの PIAAC などがある。指標と

しての記載は PISA の方が参考となる。基礎的 IT リテラシーの研究会（厚生労働省）成果物から、基礎的 IT リテラシーの定義、従来から必要なスキルと第 4 次産業革命下で必要となる要素を抜粋。海外事例の関連事例についても資料に含めている。

- ITLS においては、同一基準での熟達の違いではなく、活用シーンの違いで 1 級及び 2 級を定義してはどうか。

2　ITLS(IT Literacy Standard)案の策定について（討議）

- 本件、討議資料及び ITLS 原案ともに十分に良く整理されている。これに加え、ビジネスパーソン向けということで「成果」というキーワードがあると良い。オラクルでは、業務プロセス・基幹システムを統一するプロジェクトである、GSI（グローバル・シングル・インスタンス）プロジェクトをやっていた。各国のビジネス側と情シス部門でピアを組む、業務毎に置いたビジネスオーナの位置づけと、この 1 級のイメージと近いが間違いないか。
  - IT 人材を検討する際には従来は技術者にフォーカスしていたが、今回は事業部門のリテラシー向上についても着目し、両輪関係を意識している。LoB 側のビジネスオーナと捉えて外れてはいない。
- 1 級にコンピュータ科学の関連項目が多めに感じられるが、IT リテラシーとしてはここまで必要とされるかどうか要検討。他方、メディアリテラシー関連項目が少ないようにも感じられる。
  - コンピュータ科学関連はどの程度含めるかについては判断が分かれるところかと考えるが、本項目を含めた意図としては、技術的内容を把握できずに全て技術者等に一任するのではなく、技術者とコミュニケーションできる程度の知識は必要と考えたことによるもの。このため、項目そのものは必要と考えられるが、仰るとおり必要とする知識の深さについては、今後、ご意見等をいただきながら議論させていただきたい。
  - メディアリテラシー関連項目については、原案作成時に苦慮した点である。仔細に記載すれば膨大な量の項目となる一方、一括りとした文言とすると簡素な記載となってしまう。この点のバランスはこれからの要検討項目と考えており、皆さんのご意見をいただきながらまとめていきたい。
- 12 月公表ということで短期での作業となると思うがアプトプットのイメージはどうか。
  - 現状の資料は原案であり、最終成果物の素材の位置づけとなる。公表時にこのような表形式のままとすることはないと考えている。これからはドキュメントとして見易いものにしていく。
- IT リテラシーの統一的な定義がないことについては、かつてスキルやコンピテンシなどの、能力を表す用語が歴史的に多数用いられてきたことにも起因していると考える。IT リテラシーの定義については、精緻にするほど現実と離れる面もあるため、本資料の記載程度で適切と思われる。また、成果を出せる能力についてはそう簡単には定義できないものであるため、業務を効率

的に実施するという項目がそれに近いのではないか。資料では 1 級と 2 級の区分けが各々組織レベルと個人レベルとしているが、1 級は 2 級を包含しているわけではないということか。

- 企業レベルのコミットメントであれば当然 2 級もあると想定はしている。但し、この逆はなく、御発言のとおりと考えている。
- その場合、図と級の背景の適用範囲が異なるように感じられるが、この点は多少気になった程度である。

- 12 月に向けた定義づけの粒感を検討するにあたり、本 ITLS を発信した場合に、この定義使用者を想定することも重要と思われる。企業の人材開発担当なのか、現場の評価指標として用いられるのか、使用されるシーンによって定義づけも変わってくると考えられる。
  - 公的な立場として ITLS を用いて施策を検討するアプローチもあれば、他方、個別企業で活用するケースもあると考えられ、その範囲は広いと考えている。事務局の想定は職業人としては誰でも認識が必要な項目としている。定義の粒度については、METI に社会人基礎力という紙 1 枚で覚えられやすい啓発資料がある。啓発目的としては項目は少ないほうが良い面もあると認識している。他方、あそこまで荒いと、具体的な実装時に利用しにくいこともあり、バランスの問題であるため、検討を進めていきたい。また、啓発の取り組みについてはユニークなアイディアをいただければ幸い。
  - 資料にも定義に相当するような根拠の記載がある。これよりも詳細な落としこみは各企業で価値創造につながる人材として考えるのでも良いと思う。また、i パスのシラバスは量が多いので、どの程度参考にするかは要検討。今後の改訂の際の修正のしやすさなども考慮すると良い。
  - 濃淡のメリハリは事務局も意識しており、体系化の項目よりも、どの部分を訴求するかが重要と認識している。
- 未来投資戦略、Society5.0 などの日本の成長に向けた人材の育成について、企業・組織レベルで IT を活用できるようになるのは大事。海外ではデジタルとしている。産業分類から考える状況かもしれない。今は全分野に情報産業が浸透しているとも考えられ、ベースにある知識として ITLS を定めることは良い。また、基準を示しても個人の行動に歯止めするような規制はできないため、本基準を教育などの機会において正しい使い方を周知徹底することは大事。
- 1 級、2 級の定義・分け方は良く整理されている。内容面は今後の議論と考える。i パスや ITSS の定義で使えるものは有効活用すると良い。加えて、諸外国のキーワードを活用することも有効と思われる。メディアリテラシーも加えた方がよい。この資料にある、「ビジネスへの影響」については諸外国にはなく、良いキーワードであり、新しい観点と思える。
- 一つの観点として、ビジネスパーソン全体とすると非常に範囲が広い事を考慮するとよい。日本のビジネスパーソンには危機感を感じる理解がない故に IT に過剰な期待をする一方、抵抗する人もいる。IT にかかわる企業・社会の動きを解釈できるようになるための基準となれば理想形。

今日のデジタル分野について、AI だけでなくソーシャル・クラウドなど、具体的な理解まで至っている方が実は少ないような項目についても ITLS を通じ、浸透していければ非常に良いと取組みになると思われる。

- 1 級、2 級での区分けについて、社長でも 2 級の要素は必要と考える。社員が管理職になる際にマネジメント研修を行うことが多いが、この際に 1 級が物差しになると良いのではないか。マネジメント研修をこの基準を基に実施できると良いのではないか。
- ITLS はプラスの要素を生み出す基準というよりは、マイナスを生じさせないための要素ではないかと思われる。本基準にあるような内容を知らなかったら会社に損を与える可能性を含む項目もある。小さな事象でも会社に大きい損害があり得ることを認識していただく基準とすると良い。例えば、日本は 2 バイト文字のおかげでリスクが少ない。英語というだけで読まずに削除することも多い。しかしながら、これからは AI がでてきて、日本の企業に対しては英語、スペイン、タガログ語さえも自動翻訳が介入する可能性もある。このような場合、今の日本の危機意識では会社がつぶれるくらいの損害もあり得る。島国安全神話が崩れる時代となるかもしれない。
- このような時代では ITLS は必須の知識であり、損害を与えないための指標として普及していくのが良いのではないか。プライベートなマシンと仕事用のマシンを使い分けることは難しい面もある。今の若い世代は 20 年間プライベートのみで利用していたところ、社会人になると兼用のマシンとなり、混ざってくる場合も考えられ、要注意ではないかと思われる。マネジメント層はデジタルを子供の頃から利用している若者は理解済みと解釈し、細かく説明しない。既に分かっているから研修を省いても良いと考えるケースもある。このような世代間ギャップによるトラブルも認識している。
- また、メールの Cc に自分自身のアドレス含める人が多いが、Bcc にいれるべき、などの認識も必要となってくる。私の IBM 入社時でも To、Cc、Bcc の違いは教わった。あるプロジェクトでは、ML に加えて Bcc に送信した情報を Bcc 受信者が全員返信してしまい、信用を失ってしまうような事案がある。
- マネジメント層には物事をマネジメントとして、言葉を理解する、状況を想像する、正しい判断をするためのリテラシーとして、1 級に位置づけ、技術者の説明の解釈ができるレベルとしたほうが良い。現在のところ、技術者の説明が理解できないことにより、詳細を丸投げとしてしまい、後からそれが露呈するようなことも多く、1 級でこれを解消できると良い。
- LINE で出退勤管理したいという若者も出てきており、個別の通知で済む情報と、全員に通知する必要のある情報の展開範囲などの理解を促すことが重要。状況を想像し、正しい行動がとれることが目標。
- 使う人の能力や性格で結果が変わってしまう性質が IT の環境にはあるため、これを正すための物差しになるならば良い取り組みといえる。再就職者などへも使えると思う。過去の実績を記載

することに加え、今の能力を証明する手段となると良い。

- 能力の定義は評価とセットとなる面があり、文脈依存の話は評価が難しい。今のような(文脈依存)の要素を全て ITLS として書ける訳ではないため、この点は留意が必要。
  - 基準の他に、併せて啓発活動を通じて、知ってもらう仕掛けなどは、バラエティに富んでいるため、これから期待を込めて検討していきたい。
- コミュニケーションリスクについて、コミュニケーションにはプラスの側面もあるため、リスクという言葉が少し目立つかもしれない。
  - ここはコミュニケーションスキルなどとしてはどうか。メリットの反対はデメリットではなく、リスクになる。プラスの反対は、プラスにならないことではなく、マイナス。
  - リスクという言葉には損失だけでなく利益を含む意味を持つ場合もある。

    ※事務局注：「投機的リスク」は「純粋リスク」と異なり、利益損失双方の可能性有り。
- 高校生で起業する事例が増えてきている。中高生の起業の際に ITLS があれば、役立つのではないか。出来上がった暁には中高生にも有効活用してもらいたい。
  - ミドル・シニアだけでなく、デジタルネイティブという言葉があるが、若者だから大丈夫というわけではないということか。
- 上司と部下の意思疎通ができないことによるトラブルは良く起きている。1 級に関してはある程度の職場経験を想定しても悪くはないと思う。
- スケジュールだが、次回に案が出せるのか。ビジネスへの影響を強く出していけると良い。IT というと狭くなってしまうので、ベースが第 4 次産業革命であれば、産業革命を意識して、事業における危機感などについてメッセージ性を出していただきたい。
  - メッセージ性については、基準文書として作文するとうまく表現できない面がある。ビジネスの影響により起こり得る事象についての具体例などがあれば共有いただきたい。
- 産業革命ということを理解していただいた方が良い。会社がつぶれるリスクを全国民が認識できるような形が良い。
- IPA が出すと IT 関係者以外は関係ないと思う人もいるので、企業規模、業種等によらず広く取り込んでいきたい。
  - 見せ方については事務局で検討する。素案としての大局的なところは問題ない旨をご確認いただいた認識。今後の案作りについては個別に相談するかもしれないので、ご協力を賜りたい。

以上